LIBRARY No.8

平成 26 年 2 月 7 日

津田沼高等学校図書委員会

新刊続々到着中

前期選抜開始　－本を読もう。もっと、本を読もう。－

2 月 11 日から 16 日までのロングバケーション!! デイズニー・ランドもよいけれど、是非、この機会に本を読んでみてください。

新しく届いた本と、奥の方にしまってある本から何冊かご紹介したいと思います。

謹訳　源氏物語　　**林　望**　　**祥伝社**

今年のセンター試験の出題は、何と『源氏物語』「夕霧」からでした。よくぞ、あんなに複雑な心理描写の部分を見つけてきたことかとも思いました。

「謹訳　源氏物語」は毎日出版文化賞に輝いた源氏物語の口語訳ですが、この作品の大きな特徴は、これまでの源氏物語の訳本と大きく異なり、敬語表現を除き、平易に読めるようにしたところです。全訳になっているので、是非、好きなところから読んでみてください。

装丁にもちょっとしたしかけが・・・。是非、手に取ってみてください。

明日死ぬかもしれない自分、そしてあなたたち　　**山田　詠美**　　**幻冬舎**

大切な人が最後に亡くなってしまう話は昨今流行ですが、この本は、誰からも好かれ、尊敬された少年が亡くなった後の物語です。最愛の息子の死の衝撃によって大きなダメージを与えられた母。そのことによって、それまで、誰からも完璧だと思われたステップ・ファミリーが瓦解してしまいます。その後の家族の様子とそれぞれの人生が、「わたし」「おれ」「あたし」「みんな」と言う構成で、それぞれの視点から描かれています。それぞれが強いられる苦悩。しかし、その質はステップ・ファミリーゆえにそれぞれ違います。そこから逃げず、立ち向かっていこうとする姿勢にこの小説の素晴らしさはあると思います。

時として、暗く重くなりがちなテーマを平易な文体で軽やかに描き、人間の生き方を考えさせられる作品になっています。そして、最後のページには、さすが、山田詠美と言うしかけが。

山田詠美は 87 年「ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー」で第 97 回直木賞を受けました。当時、作家の奔放な生き方とともに、話題となった本です。山田詠美の本は他に何冊か図書館に入っていますが、その中で「僕は勉強ができない」「放課後の音符」（新潮文庫）などは、高校生のことを描いていて親近感の持てる作品だと思います。

祈りの幕が下りる時　　**東野　圭吾**　　**講談社**

この作品は推理小説であると同時に社会小説でもあると言って過言ではありません。殺人事件の捜査ではありますが、そこに登場してくる人物は、本の帯にも「極限まで追い詰められた時、人は何を思うのか。」とありますが、自分の責任ではないのに追い詰められてしまった人々の姿、そして二人の母の対照的な生き方が描かれています。「麒麟の翼」の加賀恭一郎の日本橋署最後の事件であり、加賀の母への思いが、語られる作品となっています。

何者　　**朝井リョウ**　　**新潮社**

就職氷河期がようやく終わったかと思ったら、次にリーマンショックが・・・。世界を巻き込んだ大不況は、日本の就職戦線を厳しいものとしました。３年後半から始まる就職活動。ＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の普及で、学生は企業に３ケタに上るエントリー・シートを送れるようになりました。でも、そのエントリー・シートだけで、はじかれ続けたら・・・。

ＳＮＳは、そうした使われ方だけでなく、企業側は就職希望者の日常を知ろうとし、チェックするようになってきているそうです。「何者」には、そうした第三者を意識したツイッターが扉に載っています。(現実にブログで未成年時代の飲酒を掲載したことが知られ、内定取り消しになった例もあるそうです。)

エントリー・シートで次の段階へ進めても・・・。内定をもらえなくては・・・。

大手企業の内定は４年生の３月下旬から内定者が出始め、そこで第１ラウンド終了。それが、就活生の気持ちでしょう。内定者をみんなでお祝いをしながら、その腹の底では・・・。そして、どんどん落ち込んでいく・・・内定なしの就活生。夏が過ぎても内定が取れず・・・。

「何者」はそうした学生たちの様子を、登場人物達のツイッターの文を挿入しながら、描いています。そうして、先に内定をもらった友達の就職先をインターネットで調べる理由は・・・。

本来はそうした行為は人には知られないはず・・・だったのに、・・・。

朝井リョウは 1989 年生まれで、早稲田大学在学中に「桐島部活やめるってよ」で第 22 回小説すばる新人賞受賞し、文壇にデビューしました。「桐島部活やめるってよ」を読んだ時、現代の等身大の若者の姿が描かれているのかなと、昨今の若者気質を伺い見るようで興味深かったですが、同時に最近の若い人たちって、大変だなと思いました。「何者」でも似たような感想を持ちました。作者は作家をしながら、自身就職活動をし、就職しました。そうした経験をふまえてかかれているからこそ、リアリテイのある小説となっていると思います。

悩む力　　**姜尚中**　　**集英社新書**

「本書では、誰にでも備わっている『悩む力』にこそ、生きる意味への意志が宿っていることを、文豪・夏目漱石と社会学者・マックス・ウエーバーを手掛かりに考えてみたいと思います。」

「今の世の中を見渡すと‥‥‥『人の心の闇』の中に、得体のしれないものがうごめいているような、そんな感じです。」

「自我を保持していくためには、やはり他者とのつながりが必要なのです。」

「子供のときに『自分は社会の中で誰にも承認されていない』という不条理に気づいて以来、遅々とした歩みの中で、少しずつ、人との間の相互承認の関係を作ってきたような気がします。」

「自分が相手を承認して、自分も相手に承認される。そこからもらった力で、私は私として生きていけるようになったと思います。」

上記の文は「悩む力」からの抜粋です。さまざまな人たちの思想や作品を通して人間の生き方を考えています。そこには、今２年生が勉強している「こころ」の先生の生き方についても語られています。筆者なりの解釈が載っていて、「こころ」を読解する一助になるかとも思います。

「殺伐とした世相と希望の見えない社会」と筆者は現代社会を評していますが、そこに生きる若者たちとは、まさに朝井リョウが描く若者たちではないでしょうか。そうした若者たちの何かの役に立てるのではないかと考え執筆されています。是非、読んでもらいたい本の中の１冊です。

まだ、まだ、紹介したい本はたくさんありますが、それは、またの機会に。

図書館の本は借りて興味がわかなければ返せばよいというシステムですので、どんどん借りてみてください。但し、くれぐれもなくさないように。